

國學院大學學術情報リポジトリ

携帯電話に於ける怪異の一考察：
『着信アリ』を事例として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古山, 美佳, Furuyama, Mika メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000122

携帯電話に於ける怪異の一考察

— 『着信アリ』を事例として —

古山美佳

一、問題の所在

本論文の目的は、現代に於いて怪異がどの様な形で表現され、また人々に提供されて居るのか、また其れが現代社会とどの様に関わって居るのかを考察する事に在る。

抑々論者は、現代と云う時代に於いて、日本人の宗教的な感情の発露が如何にして表象されるのか、其の一端を掴みたいと考えて居る。

現在では其の中でも、怪異の表象と其れに纏わる人々の在り方を、怪談やホラーと云ったものを題材として考察を進めて居

る最中で在る。教団宗教や原始的な自然への畏れとは異なる宗教性、詰まり、世俗の中に現れ、また其れが変化して来た様子・変化して行く様子を見る事から、其の目標へ向かいたいと考えて居る。現状に於いて、所謂聖の側面で在る祭やパワースポットに関する研究は進められて居る反面、怪異の表象と云うようなマイナスの側面に関する研究には、未だ考察の余地が残されて居るのでは無いだろうか。

以上の事を踏まえ、論者の基本的な「現代」の括りは、本来で在れば一九七〇年代の高度経済成長期以降を指すものの、本論文内に於いては、携帯電話に表出した怪異の在り方を『着信

「アリ」シリーズ^①を題材として考察する為、其の発売・流行が在った二〇〇〇年前後を現代と表するものとする。

また、題材選出の理由については、先ず論者自身が、現代を象徴するものの一つは携帯電話で在ると考えて居る事を前提として居る。其れは、後述するように二〇〇〇年代に飛躍的に進歩し、同時に現代の個人との関わりが非常に高いツールで在る事が挙げられるからで在る。

其の中で、携帯電話を怪異の表出場所として描く『着信アリ』は題材として、適して居ると考える。更に、メディアミックス展開^②を積極的に行つて居る事から、原作を読んで居なくとも、「携帯電話に怪異が起る」と云う情報は、広く共有されて居るのでは無いかと予想した為で在る。

今回の題材に関しては高岡弘幸^③が現代の幽霊の出没場所として挙げた「橋・峠・トンネル系」、「建物系」、「メディア系」の分類に照らし合わせると、「メディア系」に相当するものと云えるだろう。同じく高岡が「非・場所性の怪異^④」と呼ぶものとも云える。従来の幽霊が柳の木の下や、恨みを持つ人物の周辺等、一定の場所に出没して居た時代に対し、現代の怪異や怪談、或いはホラー系の創作物に表出されるような、「非・場所性の怪異」や或る種の無差別的な怪異は、現代に現れた一つの

変化なのでは無いだろうか。

本論文は、本来出現する場所と相手が固定されて居ると考えられて居た、従来の幽霊論と異なる「メディア系」「非・場所性の怪異」の一つとして、携帯電話の怪異の考察を試みるもので在る。

二、携帯電話の怪異…『着信アリ』シリーズ

『着信アリ』は、角川書店のメディアミックスに依り、秋元康著の原作で在るホラー小説シリーズ^⑤から、映画・テレビドラマ・ハリウッドリメイク版と云う映像作品、漫画と云つた書籍のみならず、お化け屋敷^⑥やパチンコ^⑦にも幅広く展開して居る。先ず、『着信アリ』シリーズの概要を左記に纏めるものとする。

主人公（巻毎に異なる）の友人間で、死の予告電話が次々と掛かつて来る。友人達は、未来の時間が表示された其の留守番電話を悪戯だと判断し、気にも留めなかった。然し、其の留守番電話の残された時間に成ると、次々と留守番電話に残されたものと同じ台詞を口にし、或いは同

じ行動をし、死亡して行つた。

留守番電話やメールの写真を通して行われた「死の予告」は、日本以前に台湾から流入し、更に韓国にも拡がって行く。また、其の媒体も、動画やインターネット回線に迄拡がり、多くの被害者を出す。

其の元凶は、虐待や迫害、苛めに依つて傷付けられた者が在り、其の怨念とも云える思いが互いに共鳴し合い、被害者を生んだとされる。

本論文に於いては、原則として原作で在る小説版三巻を引用して行くものとする。是は、映画版や漫画版と原作の小説版ではデテイルや人物名の表記の違い、結末についての差異が在る為で在り、また、映画版では各作品の監督が異なり、表現方法が異なると考えられるからで在る。

本作品は、携帯電話に未来の日時で死が予告され、また其れに主人公達がどのように抗つて行くのかと云う事を物語の主軸として居る。其の事を前提とした上で、本項では原作小説三巻中に表出する携帯電話の怪異について、巻毎に抽出する。併せて、其々明らかに成つて行く怪異、或いは死への対処方法を抜出し、最後に時間軸順に纏める事を目的とする。

(一) 「死の予告電話」

先ず、各巻毎に携帯電話に表出する怪異を書き出すと共に、携帯電話普及以前の同系統の怪異についても本作品内より抽出を行う。

また、本項以降、白枠で囲つた部分は本文を其の儘抜き出した箇所として、●の項目は、作中に於ける「現代」から外れた事例、携帯電話の普及以前の同系統の怪異について記して行くものとする。

① 『着信アリ』 二〇〇三年発売

・自分の携帯電話から自分の携帯電話へ着信が行われる。

五・六頁 初出

・留守番電話に未来の死ぬ瞬間の音声が残される。 六頁 初出

冒頭では自分の携帯電話に自分の携帯電話で電話は掛けられるのかと云う疑問と、未来の時間を示した留守番電話への違和感が提示される。

・暗く、不気味なメロディ（未登録のもの）が着信メロディ（以降着メロ表記）として鳴る。 三二頁 初出

元凶の水沼の携帯電話の着メロと予想される。

- ・メールでは死の瞬間の写真が送られて来る。 六九・七〇頁 初出

事例)「時間が経つことに、なつみの顔の両脇から伸びた誰かの細く青白い手が、この世のものとは思えない力で彼女の首を少しずつ、右にねじっている」写真 一一三頁

- ・置いて来た、或いは手放した携帯電話が持ち主の周辺に現れる。 七三頁 初出

・携帯電話は、火事の高熱で壊れても携帯電話会社で契約を解約し回収されても、死亡した被害者の元に現れ、発信を行い、其の携帯電話の電話帳から次の被害者が選ばれて行く。

彼女の携帯電話は、高温の炎の中で、すでに使用不可能となっていたはずだ。

血に染まった携帯電話が、まるで、意志を持っているかのように勝手に発信している光景は、そこに居る者たちをぞっとさせた。

一〇・一一頁

- ・被害者の死後、壊れた携帯電話から、無人で「——三七〇四——××××」(移転前の加賀美病院の緊急用電話番号)に発

信される。 八七・八八頁

- ・水沼毬恵の留守番電話 九四頁 初出
- ・半年間バッテリーが切れず、携帯電話会社に止められても発信して居た。 二二二・二二三頁

・留守番電話が勝手に再生され、女の低い声と笑いが流れる。 一六二〜一七一頁

「びょういんにい……つれてつてあげるう……」

一七一頁

② 『着信アリ2』…①より半年後 二〇〇四年発売

・被害者の携帯電話は、必ずしも電源を必要として居なかった。 三六頁

●一時期、*〃*死の予告電話*〃*の着メロを携帯電話に入れると云う事が流行した事の示唆。) 五三頁

・娘の代わりに携帯電話に出た父親が、聴こえて来た未来の娘の死ぬ瞬間通りに死亡(≡対処法) 五四頁

・元凶の霊との遭遇時、「今日だけ、今だけ、*〃*圏外*〃*」に成った。 九五頁

(a)女子高生の噂 携帯電話に無言電話が掛かって来る。そ

して背後に上唇と下唇を縫われた七歳位の女の子が現れ、生きた儘、口を縫われる。一〇〇〜一〇三頁

・ 廃村の地下数十メートルの坑道内で着信する。既に死んで居た相手からの電話。

・ リリーの怨念が、携帯電話の為に坑道閉山後に建てられた電波塔を通して拡がった？ 一九〇頁

● 「二三年前の回想・取つてはいけない電話」

社務所の公衆電話が着信、其の電話に出た少女（『着信アリ 2』の主人公の妹）が神隠しに遭う六一頁

然し、電話局の調査の結果、社務所の公衆電話には、通話記録が無かった 五九〜六一頁

【台湾に於ける『死の予告』】

『死の予告電話』 九一頁 初出

● 「三〇年前」家の電話に着信、電話に出た本人の声で『おまえは、いつ、どこで、どんな風に死ぬ』かを教える。 九三頁

頁

『呪われた手紙』

● 「八〇年前」死の予告をする少女リリー。 一四二頁

● 「八〇年前」リリーの死後、受け取った本人の筆跡で手紙が届き、其の内容通りに死亡する。 一四五〜一四八頁

③ 『着信アリ Final』…①より三年後？ 二〇〇六年発売

・ 未来の受信時間のメールに、死ぬ瞬間の自分の添付画像が送られて来る。 二三頁

・ 携帯電話に未来の映像が映り、其の通りに、死亡。 七六・七七頁 初出

・ 『死の予告電話』受信後の携帯電話は、電源が切れず、バッテリーを外しても電源は落ちない。 九四頁

・ 死を免れる転送は一度しか出来ない。（再転送は不可能） 九九頁

・ 『死の予告電話』の該当時間に他者が其の携帯電話を所持して居た場合、其の持ち主の死の瞬間の様子が動画として再生される 一二二〜一二四頁

前述した『着信アリ』シリーズに表出する携帯電話の怪異は、基本的に三巻総てに共通し、踏襲されて行くものである。然し、小説内に於いて、時間が進行して居る事に依り、其の怪異に対する反応は様々である。

特に顕著なのは、未だ、死の予告電話が登場人物達に情報として共有されて居ない時間軸と、人々の噂として、死の予告電話が拡まった後で在る。

冒頭部分では、死の予告電話への反応も、「大学のサークルの誰か」、「理工学部の人かかの男子学生」に依る悪戯だと判断したり、「機械オタクが細工した新手のイタ電」と予想したりと、死亡日時の寸前迄気にしないと云った状態で在った。此処では、不可思議な携帯電話の現象を、科学的な原因としか見て居らず、怪異として捉える事は無かった。

対して、死の予告電話を受けた女子大生がテレビ出演する頃に成ると、子供達の間で、着信「っこ」と云う苛めが在る事や、死の予告電話が若年層を中心に恐れられて居る事が、描写される。

また、基本的に『着信アリ』にて描写される、自分からの発信で在る、死の予告電話を始めとした、不気味な着メロ等の怪異は継続して以降の巻でも踏襲されて行くもので在る。

『着信アリ 2』では、『着信アリ』の結末の理由が語られると共に、怪異の元凶が何だったのか、誰だったのかが解明される。それは、理不尽な暴力（迫害や虐待等）を受け、死した少女達の怨念のようなものが、共鳴し合い、携帯電話を通じて次

の被害者選出、そして、死の予告の実現に現れると云うもので在る。

更に、死の予告の系譜が、口頭↓手紙↓固定電話↓携帯電話と、通信手段の発達に併せて、怪異も其の表出手段を増加させ、移動して居る事が表現されて居る事。此の事から、科学の発展⇨怪異・怪談の消失では無い事が見て取れる。

また、其の怪異の伝達にはバッテリー等の電源や、正規の携帯電話の電波は不必要で在る事も示されて居る。詳細は後述に廻すが、電磁波と霊の関係について再考察を試みる。

『着信アリ 2』については、留守番電話やメールから、動画に迄進化した事と他者を身代わりにする事で助かると云う条件が提示された他は、基本的に『着信アリ』『着信アリ 2』を踏襲して居た。

全三巻通して云える事は、主人公が全員女性で在る事以上に、怪異の原因と成った霊は少女だと云う点で在る。現代のホラー・怪談小説系を原作とし、ヒットした映画は『リング』シリーズを始めとして、女性、或いは少女に依る怨念を其の原因として居るものが多い。其の恨みを焼き付けたものが、呪いのビデオテープで在り、死の予告で在るとも云える。

此の怪談やホラーのメインキャラクターに、女性が多いと云

う指摘は、「オールジャンルJホラー・ファイル ベスト二〇〇」内の中で、江戸時代以降、日本に於けるホラー・キャラクターは概して女性優位の傾向が強い¹⁴⁾として居る。実際の処、江戸時代の怪談にも男性の幽霊は登場するので、詳細な情報では無いものの、江戸三大怪談の幽霊が、お岩・お菊・暈の女性三人で在る事や、二〇〇〇年前後に流行したJホラーの幽霊や怨念の主体として女性が描かれ、其れが人々に情報として共有されて居るのは事実で在る。詰まり、本質的な性差による幽霊や怪異に対するイメージは、女性優位と云う形で認識されて居る。此の点に関しても、今後、先行研究を調査すると共に、現代の怪異・怪談・ホラーを再考察する事を課題とする。

本論文では、性差と幽霊に関する問題は主題で無い為、一般的には女性が多いとされて居ると云う指摘のみに留めて置く。

(二) 怪異への対処法

① 『着信アリ』

・自分の携帯番号を着信拒否にする。 五一頁

此処での対処方法は、被害者の知り合いの女子高生間で噂されて居たもので在り、作中には其の効果で「死の予告電話」を免れたと云う記述も、免れなかったと云う記述も存在しない。

・「死の予告電話」を受けた人が死亡する前に、被害者の携帯電話の中に在る電話帳のアドレスを消去する。 七四頁

被害者の死後、次の被害者を携帯電話の電話帳から選出すると云う構造上、恐らく効果が在ったとされる。

「いいよ。
みんなも消したいいでしょ。自分の携帯番号？」
なつみが、携帯を突きつけると、クラスメイトたちは我先に、メモリーから自分の携帯番号を削除し始めた。¹⁵⁾

(・梅干しを携帯のストラップにつける 一三七頁

「死の予告電話」を取り上げたテレビ局が蒐集して来た街頭の女子高生達のインタビューから出た話。)

② 『着信アリ2』

・着信時に、携帯電話の持ち主以外が電話に出る。

↓電話に出た者が、入れ替わりに死の予告電話通りに死亡

五四・五五頁、一九三〜一九七頁

(a女子高生の噂 『タイワン、タイワン、カエリナサイ』と呪文を唱える。 一〇一頁)

- ・『死の予告電話』の元凶（霊）の同じ痛みに共鳴し、誰かを恨み、死へ導く加害者となる。

●台湾の『呪われた手紙』

- ・少女リリーの口を縫い付け、炭鉱に閉じ込める。 一四四頁
- ・手紙を読まない為に、箸で目を突く

③『着信アリ Final』

- ・「テンソウスレバシナナイ」と云う電話・メールが来る 三七頁 初出

然し、観光局のメールには転送出来ない。 七四頁

- ・転送された者は再転送出来ず、画像通りに死亡 九九・一〇〇頁

- ・恋人に掛かって来た『死の予告電話』に出れば身代わりになるという噂。 一八六頁

- ・メールの転送は、必ずしも自分で行わなくとも良い 二一五頁

『着信アリ』シリーズに見られる、携帯電話の怪異への対処法は、先ず携帯電話を用いると云う事と、其の呪いとも云える

『死の予告』を故意か偶然かの違いは在るものの、他者に押し付ける、詰まり誰かを犠牲にすると云う方法のみで成り立って居る。

作中には、其れ以外の方法も女子高生間の噂と云う形で登場するものの、実際の効果については一切記述されて居ない。

此の対処方法は、登場人物同士の間関係に亀裂を入れるものとして描かれて居る。此処では二点注目して見る。先ず、『着信アリ』の女子大生なつみの事例で在る。

問題の箇所は前述して居るが、怪異や死への恐怖から、友人やクラスメイトは自分が助かる為だけに、彼女の携帯電話の電話帳から自分のアドレスを消去すると云うシーンで在る。共に解決を目指すのでは無く、自分の安全の確保とアドレス消去の後、直ぐに立ち去って行った友人の描写を入れる事で、人間関係の繋がりの脆さを演出して居るとも云える。

更に、『着信アリ Final』では、「テンソウスレバシナナイ」『転送すれば死なない』と云う、明確に誰かに其の『死の予告』を押し付ける事が可能で在ると云う情報が冒頭から提示される。同作中では主人公のクラスメイト達が、本気にせず犠牲者と成ったり、迷った末の転送で在ったり、クラス内の苛め被害者から加害者への復讐として利用されたりした。

然し、其れとは真逆のベクトルで、『着信アリ 2』・『着信アリ FORE』のクライマックスのシーンでは、死の予告²を受けた女性達の恋人が、自己犠牲を前提として其の携帯電話の通話に出たり、メールの転送を行ったりして居る。

本来、人と人との「繋ぐ」携帯電話に表出した怪異が、其の繋がりを断絶させるような対処方法を提示する点³が、物語の肝とも云える処だろう。総合的な考察は最後に廻すものとする。

(三) 死の予告の進化と対処法の解明

『着信アリ』シリーズ全体を通してみても、死の予告²は、通信機器の発達と共に進化を遂げて居ると云える。作中の「現代」が何年を指して居るのか定かでは無いものの、此処では各原作の発売年前後で在る二〇〇〇年代を「現代」と仮定し、(一) 死の予告電話²と(二) 怪異への対処法を、一端、時系列順に並び替え整理して見る。

① 「八〇年前」 推定一九二〇年頃

『着信アリ 2』に於いては、先ず、死の予告²は、予告者の口頭に於いて行われ、其の口が封じられた後には、被害者筆跡の手紙に依る、死の予告²が行われたとされる。此の時点で、

既に後半に関して怪異と云えると考えられる。手紙の筆跡は、手紙を送られた本人のもので在ったとされる。

また、当時の死の回避方法は、予告者の口を縫い、閉じ込めて殺害や、自身の目を突き、手紙を読まないようにする等、酷く原始的な方向に偏って居ると云える。是は、作中に於ける当時の人々が、死への恐怖からか一種の集団ヒステリーと化し、暴挙に走った様が描かれて居る。

② 「三〇年前」 「三年前」 推定一九七〇～一九八〇年頃

①と同じく『着信アリ 2』内にて描かれる。此処では、自宅や公衆電話等、固定電話に被害者の声に依る予告が行われる。作中では、未だ、留守番電話が無かった時代と表され、特別に対処方法は示されて居ない。

③ 「現代」 二〇〇〇年代前半

『着信アリ』シリーズ全体の主軸と成る舞台として描かれて居る。

携帯電話に、死の予告²の留守番電話、メール添付写真、動画が送られて来る。

其の対処方法は、故意・偶然問わず、誰かが其の電話に出

る・誰かにメールを転送する事と記述されて居る。其の結果として、最低限着信を受けた本人だけは助かると云うものであり、人間不信の様子が描かれ、犠牲者の決定を行う一端を担った事に耐えられず、精神に異常をきたした様子が描写される。¹⁶⁾

行雄が、突然、大声で校歌を歌い始めた。

「行雄？」

速人と孝治が振り返ると、行雄が直立不動の姿勢で焦点の合わない目をしていた。

表情のない顔に鼻水が垂れている。

前述したのは、メールの転送を恐れ、また一方では信じて居なかつたクラスメイト達が「万が一のため」、閉じ込めた被害者候補が死に行く様を、動画と云う形で見せられ、其の死体を発見した際のクラスメイトの反応の一つで在る。

他のシーンに於いても、自分が生きる為に「友人」を犠牲にする選択と其れを非難する描写がされる。

此処迄、『着信アリ』シリーズに散見される携帯電話の怪異を見て来た。次項では、携帯電話と云う媒体と、怪異や霊と云った存在と関連性を纏めて行く。

三、現代に於ける怪異の表象と携帯電話

携帯電話の普及は岡田朋之・松田美佐等に依り『ケータイ社会論』¹⁸⁾に纏められて居る。同書の文末には、移動体メディア関連年表が記載されて居り、本項では其れを参考として考察を進める。

同表に依れば、携帯電話の通信定額制が始まったのは、『着信アリ』シリーズの開始された二〇〇三年で在り、翌年には一部の携帯電話会社でパケット通信料無料のサービスが始まり、また、『着信アリ』の映画公開・『着信アリ2』が発売されて居る。

更に付け加えるのなら、丁度同時期で在る二〇〇〇年代には、様々な怪談や都市伝説、怖い話等の本が発売され、其の書籍の多くに携帯電話に纏わる怪談も内包されて居た。

(一) 怪異への恐怖

『着信アリ』シリーズに於いては、所謂現代の科学では携帯電話に起こり得ない現象を怪異と云う原動力の元、表現して居る。其れは例えば、自分の携帯電話から自分の携帯電話への着信と未来の時間からの着信に関する事で在る。

此の事象一つ取ってみても、『着信アリ』では、科学技術に基づいた人間に依る悪戯だと考える事に始まり、徐々に其の発着信が、異様なもので、現代の科学に適応しないと判明する。また、電源が無くとも、壊れて居ても稼働すると云う条件から、本来の電波以外の何者かの関与が示唆される。

一方で、死への恐怖其のものが作中に於ける恐怖として描かれて居る。『死の予告』では、携帯電話に、自分の死ぬ瞬間の周囲の音や自分の声、其の様子を写した写真が事前に送られて来る。また、着信時間が其の儘、死亡予定時刻として提示される為、迫り来る命の刻限と、日常生活では余り目にする事も耳にする事も少なく成った「死」への恐怖の双方が、併せて携帯電話の怪異へと向けられて居ると考えられる。

(二) 霊・怪異への認識

今回題材にした『着信アリ』シリーズ内で、怪異や霊に関する言及をして居るのを抽出したものが、左記で在る。

女子大生⁽¹⁹⁾

身近な人間が死ぬと、魂が浮遊しているようで、恐怖に對して過敏になる。

園児⁽²⁰⁾

「雨が降ると、死んだ人が、お空の川から帰って来るとだつて……」

自称霊能者⁽²¹⁾

「霊つちゅうのは、電磁波にとっても似とるんよ。
空中に浮かぶ想念のエネルギーでね、
それを携帯電話がキャッチした、と私は見とるのよ」

物理学の大学教授⁽²²⁾

「もし、この世に霊が存在するとしたら、それは、電磁波のようなものだろう」

刑事⁽²³⁾

(前略) 『死の予告電話』を受けた被害者たちの携帯は、必ずしも、電源を必要としていなかったという点だ。
電源を切ついても、バッテリーを外していても、携帯を使えたのは、ある特別な電磁波をキャッチしたからではないか？
まるで、携帯が、霊の電磁波を受け、あつちの世界と

こつちの世界を結ぶ唯一のツールであるかのように……。

保育士²³⁾

考えてみたら、電話は、見えているものと見えないものを繋ぐツールだ。

こつちの世界とあつちの世界が、電話で繋がっていてもおかしくないような気がして来た。

以上の抜き出した箇所からは、本書に於ける、怪異や霊に関する事、また、携帯電話との関連性を見て取る事が出来る。

最初の二点については、登場人物が、霊は何処に居るのかと云う事をどのように考えて居る事を示して居る。此処では、諸宗教に在るような天国や地獄に居ると考えるよりは、漠然としては居るものの、自分達の周辺に存在して居る、或いは逢いに来ると考えて居ると云えるだろう。

『着信アリ』発売の同年は、新井満²⁴⁾に依つて「千の風になつて」が発表され、大流行した年でも在る。「千の風になつて」の歌詞の中でも、墓の前で泣かないで欲しい事や其処には居らず、「私」こと死者の魂や心のようなものは、千の風になつて空に吹き渡つて居ると云うように表現して居る。

本書に於ける霊の所在の考え方は、同年に流行した「千の風になつて」の内容とも併せて、当時二〇〇〇年代初頭の霊魂観の一端が表現されて居るのでは無いだろうか。詰まり、教団宗教から距離を取った現代日本人に於いて、死後の世界は天国や地獄と云つた遠方に在る国と云うよりは、自分達に隣接する世界だとする考え方が表出して来たと言ふ可能性が示唆出来る。

また、『着信アリ2』に於いては、死に行く恋人からの「また、めぐり会える」と云う台詞から、漠然としていて体系化もされて居ないものの、魂や霊、生まれ変わりを前提とした云い廻しがされる。

是は、作中全体を通して、非科学的な怪異や霊を否定したが一方で、人々の中で漠然と共有されて居る霊魂観の一端として考える事が出来るのでは無いだろうか。

霊に対する考え方は、『着信アリ』シリーズに於いては、登場人物の思考を通して読者に提示されて居る。其れは、立場は異なるものの、霊とは電磁波のようなもので在ると仮定し、電波を受信する携帯電話ならば、其れをキャッチする可能性も在ると考えて居る事で在る。

具体的な内容に関しては、前述した本文を参照して戴きたい。

此処迄提示したような、霊と電磁波の関係については、明治時代の千里眼実験や其れに伴う念写実験の影響を受けて居ると考察される。是等のモチーフは、『着信アリ』シリーズが発売される以前に、日本の「ホラー」を代表する作品の一つとして現れた、『リング』シリーズ⁽²⁶⁾にて、其の存在が読者を中心として知れ渡ったとされる。

念写実験については、当時の様子を和達清夫⁽²⁷⁾が振り返る形で、左記のように論述して居る。

四国の丸亀に判事の夫人で長尾いく子という人が、透視だけでなく念写ということを始めた。精神統一によつて写真の乾板に思う文字を感じさせるといふのである。

当時行われた実験の具体的な内容等は、本論文から乖離して仕舞う為、詳細は記述しないものの、此処で、人間の念に依る不可視で在る能力の存在が、新聞報道と云う当時のメディアの力を通して、人々に共有された事が重要で在ったと考える。

此の念写と云うモチーフを、現代の技術と複合させた怪異こそが、『リング』に於ける「呪いのビデオテープ」で在る。是は井戸に落とされた貞子の怨念が念写に依つて焼き付けら

れ、見た者を七日後に死へ誘うと云うものとして設定された。

此の『リング』シリーズが先行して、流行した事からも二〇〇〇年前後の日本に於いては、霊が科学的な発明品と共鳴し、其の中に怨念を残す形で、人々に怪異を提供して行くと云うモチーフは、一定数に受け入れられて居たと捉えて良いのでは無いだろうか。

此の事に対して、鷲谷花は「怪談」が正統的な価値を獲得するための重要な条件のひとつは『実話性』で在るとした上で、近代日本文学史に於ける、優れた「怪談」の書き手の一人で在る岡本綺堂の意見を加味した上で怪談の恐怖について述べて居る。

「怪談」が受け手のうちに喚起する『恐怖』の効果は、超常的な存在や怪異を描き出す奔放な空想力のみならず、『実話性』によつても支えられてきたのである。

詰まり、其の怪異や霊に対する考え方・感じ方は、一創作物の中だけの設定では無く、現代の人々の怪異や霊に対する態度と一定の共通する部分が在ると捉えて良いのでは無いか。

(三) 携帯電話と繋がり

本項では、前述して来た怪異や霊に対する設定や考え方を前提とした上で、携帯電話の繋がると云う側面と、怪異の流入と云う側面について論じて行く。

そもそも、携帯電話は他者と他者を繋ぐツールの一つで在る。携帯電話に関して云えば、今や殆どの人々が所持して居るもので在り、現在の其の事情を、武田徹は「持ち運び可能な個室電話」とすら称した。

また、『着信アリ』本文中でも冒頭で女子大生が以下の様述べて居る。³⁰⁾

気づくと、携帯電話を手にしてしまうのは、自分たちの世代の習癖だと思う。
一人暮らしのこの部屋に、電話は引いていない。
里奈と世間を繋いでいるのは、この小さなツールだけだった。

余談と成るものの、発表者が携帯電話と同じく現代社会の象徴の一つと考えて居るのが一人暮らしで在る。

一人暮らしで固定電話を引いて居ない例は多く聞く。一方、

携帯電話と成ると、電話やメールと云った基本的な連絡ツールとして使用される以外にも、時計やアラーム、スケジュール帳、様々な店のメンバーズ登録等、一個人のプライベートな情報が多く保存されて居る機器でも在る。

併せて、携帯電話は固定電話に比べて遙かに個人との関わりが深く、自己証明の手段の一つで在るとも云えるだろう。

嘗て、純粹に連絡手段で在った携帯電話は、現在に於いては他者と繋がる為の最重要機器とも云える変化を遂げつつ在る。特に若年層に顕著で在るのは、携帯電話が無いと他者に対する多くの連絡手段を失う事や、携帯電話内に収められて居る電話帳・line・SNSだけで繋がった人々が増加しつつ在ると云う点では無いだろうか。詰まり、他者と繋がる為には携帯電話の存在の比重が大きく成って居ると云う事である。

其の上で、『着信アリ』シリーズでは、其の個人の表象とも云える携帯電話が怪異の媒体として扱われ、怪異や霊すらも繋がって仕舞うと云う恐怖を演出する一方で、其の『死の予告』を他者に押し付けると云う繋がりを断ち切る原因としても描かれて居る。

川村湊は、³¹⁾「人の輪、人の鎖が途切れたり、欠けたりしながらつながってゆくことが、これらの三部作のもう一つの隠され

たテーマだからである。」と『リング』シリーズについて論じて居るが、『リング』流行の流れの中で現代の日本に発表された『着信アリ』も同一の、或いは近接したテーマを有して居るのでは無いかと考察される。

特に此の他者と繋がる事・途切れる事は、先述したように携帯電話自体の現状を示し、また、怪異を切欠として自分の意志で誰かとの繋がりを切り捨てると云うテーマも内包して居ると考えられる。

故に、携帯電話の怪異は繋がる事の恐怖と、途切れる（途切れさせる）事の恐怖を根底に於いて、『死の予告』に関する根源的な怖れと共謀する形に成ったのでは無いだろうか。

四、総括

本論文では、『着信アリ』シリーズを題材として、現代に於ける怪異の表象に関して考察を進めた。携帯電話と怪異の表象と云う題材に関しては、未だ考察されて居ないのでは無いだろうかと云う点が在ったからで在る。

問題の所在で前述した高岡は、映画『リング』シリーズを取り上げ、其の呪いがビデオテープを通して増殖・感染して行く

点に注目し、従来の其の場所に訪れたから呪われると云うような、場所性の怪異と異なるものが現代に現れて居る事を指摘した。

更に、鈴木潤²²⁾は、『邪願霊』『リング』を題材として、レンタルビデオと云うアンダーグラウンド的な要素と其のシステムやビデオテープの特性と併せて、ホラーブームとJホラーの連続性を論じた。以上の様にビデオテープを媒体とした怪異の流布や感染に関しては、研究が進められつつ在る。

反面、携帯電話と怪異に関する研究は、発表者が搜した処余り着手されて居ないようである。

総務省²³⁾の東海総合通信局では、移動体通信（携帯電話・PHS）の年度別人口普及率と契約数の推移、携帯電話所持者は該管内に於いて、『着信アリ』発売当初の二〇〇三年度末には六八・五%、昨年度末で在る二〇一四年には一〇四・五%として公開されている。其の事実から見ても、携帯電話程、現代の人々に密着した個人メディアは他に無いと云えるだろう。近年に至っては、一〇〇%以上、詰まり複数台所持して居ると云う現状も見取れる。

前述したように、携帯電話の普及率の高さを前提とした上で、本論文では、携帯電話と云う現代の於いて必要不可欠な連

絡ツールが怪異の入り口として表象された『着信アリ』シリーズを考察した。少なくとも、『着信アリ』シリーズがメディアミックスを経て、多くの人々に受け入れられた様子を見る限り、本文中に記された怪異と其の表象は、人々にとって面白さや恐怖と云った興味関心を引くもので在ったと仮定される。

先に述べたように、怪談やホラーの受容には一定の実話性や、其れに近接した信じたくなる要素が必要で在るとされる。詰まり、或る程度流行した作品の表出する怪異は、其の創作物の中のみで留まるものでは無く、現代の人々の恐怖の一端を表出したもので在ると仮定する事が出来るだろう。

また、現代に於ける怪異の表象は、怪談やホラーと云った作品群や噂話を通して、世間に浸透して居るものと考えられる。其処で、特に人々の関心をそそるものが、携帯電話を始めとした身近な電子機器（カーナビ等）に、死者が現れる事だと考察される。様々な都市伝説や『リング』『着信アリ』に共通して云えるのは、死者或いは霊が電波等の媒体を通じて電子機器に宿り、其の持ち主を無差別に死に至らしめると云う点で在る。詰まり、現代に於ける怪異は、目に見えない電波に近いものと考えられ、其の表出に際し電子機器に宿るものと考えられて居るのでは無いかと云う仮説が立つ。

念や怨念と云う生死を問わず人の感情の不可視の力については、前述したように明治時代から、様々な指摘がされ、併せて否定されて来たと云う歴史が在る。

以上のような流れの中で、現代日本人は、科学的思考に準拠した考え方を踏襲する一方で、未だ科学の力では解明出来ない何かの存在と影響力を怪異として捉えて居るのでは無いだろうか。勿論、総ての怪異の表象がそうで在ると云うのでは無く、現代の「メディア系」怪異の表象の根本に在るのが、其の思想なでは無いかと考察して居る。

「メディア系」「非・場所性の怪異」は、怪異や霊を電磁波のような不可視の存在として捉える事、そして其の存在は、普段認識して居ないだけで身近に在ると云う事を前提として語られている。其れは、是迄の考察からも現代日本人の恐怖の対象と云う、一つの宗教性が世俗の中に表現されて居ると云えるのでは無いだろうか。

従来の理解出来ない存在に対する恐怖（例えば、死の予告、や非科学的な事象に対する忌避感）だけで無く、繋がる事・途切れる事と云った別の側面の恐怖も、現代日本には共有されて居る事が予想される。

今後、別の視点から携帯電話を一つの怪異の表象の場とし

て考察を進めて行きたい。

註

- (1) 二〇〇三年原作小説発行から、二〇一五のパチンコ台導入に至る展開を見せる
- (2) 異種メディアを組み合わせる事
- (3) 高岡弘幸「幽霊の変容・都市の変貌 民俗学的近・現代研究に向けての試論」(国立歴史民俗博物館研究報告 第一三三集「共同研究」民俗学における現代文化研究)二〇〇六)
- (4) 高岡弘幸「ケータイする異界 怪異譚の現在」(日本人の異界観 二〇〇六)
- (5) 秋元康『着信アリ』角川書店、二〇〇三
秋元康『着信アリ2』角川書店、二〇〇四
秋元康『着信アリE』角川書店、二〇〇六
- (6) 東京ジョイポリスにて公開
- (7) 藤商事COR着信アリ <http://www.fujimarku.co.jp/products/machine/chakushin/sp/index.php>
- (8) 秋元 二〇〇四 五三頁
- (9) 秋元 二〇〇四 一六〇～一六二頁
- (10) 秋元 二〇〇四 一九八・一九九頁
- (11) 秋元 二〇〇三 六頁
- (12) 秋元 二〇〇三 三三頁
- (13) 西口徹編『KAWADE夢ムック文藝別冊「総集編」最強ホラー・ナビ 二〇〇〇【日本篇】河出書房新書、二〇〇〇
- (14) 西口 一五八頁

- (15) 秋元 二〇〇三 七四頁
- (16) 秋元 二〇〇六 一二六頁
- (17) 秋元 二〇〇六 一八頁
- (18) 岡田朋之・松田美佐編『ケータイ社会論』有斐閣、二〇一二
- (19) 秋元 二〇〇三 五頁
- (20) 秋元 二〇〇四 四一頁
- (21) 秋元 二〇〇三 一五四頁
- (22) 秋元 二〇〇四 三六頁
- (23) 秋元 二〇〇四 三六・三七頁
- (24) 新井満HP「バンタラランド通信」http://www.twin.ac.jp/~m_necht/index.html
- (25) 新井満HP「バンタラランド通信」http://www.twin.ac.jp/~m_necht/index.html
- (26) 鈴木光司『リング』角川書店、一九九一「を始めたとした続編『らせん』『ループ』『エス』『タイド』、外伝作品『バースデイ』を原作とした複数のテレビドラマ、ラジオドラマ、映画、漫画、テレビゲームの総称
- (27) 和達清夫「念写夫人―丸亀千里眼実験顛末―」(心 三月号)一九七三)
- (28) 鷲谷花『リング』三部作と女たちのメディア空間 怪物化する「女」、無垢の「父」(日本映画史叢書⑧ 怪奇と幻想への回路―怪談から「ホラーへ」二〇〇八)
- (29) 武田徹『若者はなぜ「繋がり」たがるのか ケータイ世代の行方』PHP研究所、二〇〇二 一五～一八頁
- (30) 秋元 二〇〇三 四頁
- (31) 川村湊『異端の匣―幻想・ホラー・ミステリー文学論集』インパクト出版会、二〇一〇 三〇八頁
- (32) 鈴木潤「レンタルビデオ市場におけるホラーブームと「ホラー」の連続性―『邪願霊』から『リング』へ―」(二松学舎大学人文論叢第九四

(33) 輯「二〇一五」
総務省HP

http://www.soumu.go.jp/soutsu/tokai/tool/tokeisiryo/idoutai_nenbetu.html